

『全国鳥類繁殖分布調査』で、わかったこと



2016年～2020年までの5年間に全国約2300コースで実施された鳥類繁殖分布調査の集計結果がNPO法人：バードリサーチ様により2020年12月に報告されました。

この『全国鳥類繁殖分布調査』は環境省により、第1回1970年代、第2回1990年代と第3回目の今回2016年～2020年（5年間）と、20年毎に実施しています。今回の繁殖分布調査報告結果により、日本における生物多様性の評価、レッドリストの改定資料、環境アセスメント調査の基礎情報となる重要な役目を持つ調査です。

第1回・2回は環境省の事業として調査実施されましたが、第3回目の今回は予算が確保できずNPO法人バードリサーチが主体となり、環境省は援助する体制でスタートし、日本野鳥の会・日本野鳥の会各支部をはじめ鳥類関連する多くの団体の協力で調査することになり、57団体約2000人の調査参加を得ることができました。

「るりかけす165号」でも途中経過として紹介させていただきました内容と重複する部分もありますが、改めて調査結果報告内容をお知らせして日本国内の野鳥の生態系の変化を認識していただければと思います。

∞∞∞∞ 広範囲に分布する鳥 ∞∞∞∞

	1974-1978	1997-2002	2016-2020
1	ウグイス	ウグイス	ウグイス
2	ホオジロ	ヒヨドリ	ハシブトガラス
3	キジバト	キジバト	ヒヨドリ
4	ヒヨドリ	シジュウカラ	キジバト
5	シジュウカラ	ハシブトガラス	シジュウカラ
6	ハシボソガラス	ホオジロ	ホオジロ
7	スズメ	カワラヒワ	カワラヒワ
8	カワラヒワ	コゲラ	コゲラ
9	ハシブトガラス	ハシボソガラス	キビタキ
10	モズ	スズメ	ハシボソガラス

∞∞∞∞ 個体数の多い鳥 ∞∞∞∞

	1997-2002		2016-2020	
1	ヒヨドリ	33,438	ヒヨドリ	32,642
2	スズメ	30,650	ウグイス	23,145
3	ウグイス	24,593	スズメ	20,008
4	ツバメ	14,700	ハシブトガラス	12,380
5	ホオジロ	13,860	ホオジロ	10,674
6	ハシブトガラス	12,192	キジバト	10,398
7	ムクドリ	12,039	シジュウカラ	10,165
8	カワラヒワ	11,283	カワラヒワ	9,903
9	キジバト	10,675	ツバメ	8,779
10	メジロ	10,261	メジロ	8,617

実際の調査コースは山間部が多く設定されていて、街中に多いスズメやムクドリなどの数は調査外になっていると考えられますが、右のスズメの確認個体数が1万羽も少なくなっているには驚かされます。

∞∞∞∞ 分布を広げた鳥(コース数) ∞∞∞∞

※コースは調査した2300箇所のコース

		1997-2002	2016-2020	増減(%)
1	ガビチョウ	15	207	1280.0
2	ソウシチョウ	48	198	312.5
3	ヨタカ	19	59	210.5
4	キバシリ	32	94	193.8
5	カワウ	104	302	190.4
6	サンショウクイ	187	474	153.5
7	ヤマゲラ	37	78	110.8
8	サンコウチョウ	201	416	107.0
9	フクロウ	34	69	102.9
10	アオバト	403	789	95.8

∞∞∞∞ 分布が減少した鳥(コース数) ∞∞∞∞

※コースは調査した2300箇所のコース

		1997-2002	2016-2020	増減(%)
1	コアジサシ	57	15	-73.7
2	アマサギ	114	40	-64.9
3	コサギ	234	97	-58.5
4	ゴイサギ	234	99	-57.7
5	ササゴイ	45	21	-53.3
6	ハリオアマツバメ	46	22	-52.2
7	ハイタカ	47	25	-46.8
8	バン	87	48	-44.8
9	オナガ	68	39	-42.6
10	アマツバメ	141	85	-39.7

※※※ 変化の共通点 ※※※

∞∞∞∞∞ 小型の魚食性の鳥の減少率が高い ∞∞∞∞∞

減少率が顕著な鳥は「ヤマセミ」です。1970年代には九州から北海道まで分布が確認され、特に中国地方や中部北陸では確認コースが多かったのですが、1990年代には確認地点が減り、今回は確認地点が全国に点々とした状況になって、疎らな状態にまで減少してしまいました。



(ヤマセミ)

その他にも小型の魚食性の鳥は、コアジサシ・ゴイサギ・ササゴイ・コサギなどにおいても、ヤマセミと同様な傾向を示しています。

この減少の原因を考えるには、小型の魚食性の鳥とは反対に分布を広げて個体数の増えた魚食性の鳥がいることが挙げられます。それは大型の魚食性の鳥でカワウ・ミサゴ・アオサギ・ダイサギなどで、食物（魚）をめぐる戦いになると大型の鳥が優位に立ち小型の鳥への食べ物が少なくなっていることが考えられます。

それとサギ類は集団でコロニーを作りますが、大きな鳥は子の成長に時間がかかるため繁殖を早い時期からはじめ、小型の鳥はその後から繁殖を始めると、どうしても力の強い大型の鳥との競争では勝てなくなってしまいます。

もう一つ考えられるのは外来種の魚（ブラックバス等）の繁殖により小魚の数の減少で、小型の魚食性の鳥には絶対量が減少していることも考えられます。しかし、外来種（ブラックバス）も大型の魚食性の鳥には良い食餌になっていることもあり、逆の現象が考えられるようです。さらに小型のサギ類は開けた場所に居ることが多いため、猛禽類の標的（捕食）になりやすい事も減少の一因にも推測されます。



(ミサゴ)

∞∞∞∞∞ 外来種の増加 ∞∞∞∞∞

前ページの左下『分布を広げた鳥』1位と2位が外来種ガビチョウ・ソウシチョウです。**ガビチョウ**は1990年代の調査では九州北部と中部・南関東の一部でしか確認されていませんでしたが、今回では九州中部北部・中部・関東全域で広く確認されるようになりました。

また、標高の低いところで暮らす留鳥であるガビチョウが、今回の調査では標高の高い場所での確認数も増え、もともと寒いところには住んでいなかったが岐阜・長野と北陸の境まで確認されています。このことから夏には北陸近くまで、冬には関東中部へ移動する可能性も考えられ、留鳥から移動する鳥になる可能性も推測されます。

ソウシチョウも1990年代は九州全域と紀伊半島中部で多くが確認されていましたが、今回の調査では九州から中部・関西・東海・関東まで分布を広げています。ソウシチョウは冬場は暖地へ移動する鳥になりますが、定着することもあり生息場所・範囲を広げています。



(ソウシチョウ)

∞∞∞∞∞ 森の鳥は増加、ヤブ（藪）の鳥は減少している ∞∞∞∞∞



(サンショウクイ)

森の鳥の分布が広がってきている。特にアオバトは1970年代・90年代と今回と調査した多くのコースで幅広く繁殖の確認がされました。他にも森の鳥としてサンショウクイ・サンショウクイ・キバシリ・ヤマゲラなどが個体数も分布範囲も広がっていることがわかります。私たちの興味のあるアカショウビンも全国的に範囲を広げていますが、北海道では分布が減少、関東から東北の太平洋側では広がっていないこともわかり、地域による条件の違いが何であるか？は興味のあるところです。

今回の調査で森の鳥の増加した理由として考えられるのは、森林の面積（林野庁の資料でも）には変化はありませんが、植林も雑木も手入れや伐採が進まず木自体が太く大きくなってきて、そこで生息する鳥には環境が良くなってきているようです。

また、森林にいる鳥で**藪に住む鳥が減ってきています。**コマドリ・コルリ・ウグイス・ソウシチョウ（外来種）で藪の多い調査コースの結果で確実に減少が見られます。

これはシカの影響があると考えられます。環境省のモニタリングサイト1000でもシカによる被害は報告され、例えばセンダイムシクイは全国的に分布を広げ個体数も増えていますが、シカの害のある地域では減少している結果があり、同時にカッコウ類のツツドリの数も同じ地域では連動して減ってきています。

また、森でも標高の高い場所で繁殖する鳥ビンズイなどは数を減らし、アオジも繁殖確認数が減ってきています。これには温暖化による高地の気温の変化で繁殖地を北へ移動している可能性があります。今回の調査結果からもアオジは日本での繁殖は減っているが、ロシアでは逆に繁殖数が増加したという報告もあり、温暖化の指標になるかもしれません。



(アオジ)



(アマサギ)

∞∞∞∞ 農耕地の鳥の減少 ∞∞∞∞

農耕地で減少してきている鳥は、アマサギ・サシバ・ツバメ・ハシボソガラス・スズメなどです。原因の一つは農地の耕作放棄が考えられます。田んぼの面積が減少すると昆虫や地中の虫を獲る場所が少なくなり、カエルを獲っている鳥にも同じことが言えます。特に田んぼ近くのサシバが今回の調査では全く確認されなかったこともデータとして上がってきています。

また別の原因として考えられるのは、前々ページにスズメの数が1万羽も減ってきているとありましたが、調べると広い面積の農地（しっかりと管理されている）で減ってきているようです。農薬のネオニコチノイド系の使用で、外国ではミツバチが居なくなったり、鳥の数が減っていると言われていています。日本でも同じような現象が起こっているかもしれません。

∞∞∞∞ 新しく繁殖を確認 ∞∞∞∞

今回の調査結果で新しく繁殖し始めた鳥を最後に紹介します。ジョウビタキ（本州中部の標高の高い場所）やミヤマホオジロの繁殖例が確認されました。また、セグロカッコウも繁殖の可能性が出てきています。中国山地や九州北部山地で6月に確認がされていて、5月の移動とは違う結果が出てきて、今後に正確な繁殖状況がわかってきそうです。

∞∞∞∞ 最後に鹿児島県では ∞∞∞∞

今回（5年間）の調査で鹿児島県内も20年前とほぼ同じ76コースで繁殖調査を実施いたしました。繁殖調査は同所・同時期の野鳥の繁殖および生息状況を確認するのが、過去との比較する上でとても重要な記録になります。鹿児島県内の多くの「野鳥の会」会員の方々と、野鳥保護を支援される方々の協力のもとに調査も完了することができ、感謝を申し上げます。

調査箇所の中で、『公益財団法人・日本野鳥の会』の会長である『上田恵介氏』が鹿児島県・屋久島の対象2コースを直接調査に来られました。これは調査コース参加者（調査実施者）が未確定であり、上田会長の意志により調査された箇所です。2020年6月6日に屋久島入りし、6月7日（日）AM 5:00～（同行者+4名）に花山歩道（花山登山道入り口～花山広場付近）、6月8日（月）AM 5:30～（同行者+3名）は宮之浦岳登山道（淀川登山口～翁岳分岐）と2日に渡り分布調査に協力していただきました。上田会長の直接の調査に感謝申し上げます。

(写真・報告：原裕之)

参考文献：全国鳥類繁殖分布調査（2016–2020） NPO法人バードリサーチ

参考ホームページ：bird-atlas.jp NPO法人バードリサーチ

詳細参考動画：『全国鳥類繁殖分布調査』で見えてきた全国的な鳥の変化 NPO法人バードリサーチ：植田睦之
bird-atlas.jp 「調査結果」 ページ Youtube動画